様式3

令和7年度　学校自己評価表

鳥取県立倉吉農業高等学校

中長期目標（学校ビジョン）	農業教育をはじめとして、あらゆる教育の場において豊かな感性を育て、基礎基本を大切にして知の修得に努め、自らの可能性を信じて不断の努力を惜しまない生徒の育成を図るとともに、地域や社会の健全で持続的な発展を担う職業人の育成を目指します。

今年度の重点目標	1　各科の特色を活かした新たな魅力づくり 2　地域に貢献できる専門人材育成 3　生徒の主体的な学びの推進 4　生徒募集・定員の充足 5　業務改善

年度当初						評価結果（　）		
評価項目		評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	今年度の目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	目標達成のための改善方策
1	各科の特色を活かした新たな魅力づくり	各科の特色作り	・生物科は、産官学の連携を図り、プロジェクト学習に積極的に取り組んだ。 ・食品科は、パンの商品開発に取り組み、「お米甲子園」で日本一を獲得した。 ・環境科は、「建築・森林」や「建設DX」の新設コースがスタートする。	・飼育、栽培をとおし、地域社会に貢献できる魅力づくりを目指す。 ・安全な食品を製造できるとともに、流通に関する能力や態度を身に付ける。 ・新設された「建築・森林」、「建設DX」コースが円滑に授業が行われる。	・関係機関との連携を強化し、地域の課題解決や農業の魅力発信に努める。 ・マーケティングの考え方に基づき、商品開発や販売実習を行う。 ・工業科目などの新しい科目のスタートに際し、シラバスを点検しながら授業を進めていく。			
		地域との交流及び情報発信	・農業科では、課題研究、販売イベント、倉吉駅周辺の装飾など、地域と連携し、情報発信を行った。	・農業の多面的機能やフードシステムや環境問題等の知識や技術を習得するとともに、地域社会で貢献できる人材を輩出する。	・関係機関や地域との連携を促進させ、情報発信とともに、その成果を地域に還元する。また、コミュニケーション力が涵養されるような仕掛けをする。			
2	地域に貢献できる専門人材育成	農業経営者の育成と進路意識の定着	・スーパー農林水産業士の認定は3名であった。また、農業系の進学者は四年制大学4名、県内外の農業大学校6名、専門学校2名であった（卒業者の29%、昨年は13%）。	・農業系の進学者は一昨年の13%を目標とする。	・スーパー農林水産業士育成プログラムに則ったカリキュラムを遂行し、農家での就業体験を通して、就農意欲を醸成する。			
			・明確な進路目標を設定し、進路実現に向けて取り組んでいる生徒は少ない。また、必要な基礎学力が身に付いていない生徒も多い。	・鳥取大学農学部進学者1名以上、公立鳥取環境大学進学者1名以上を目指す。また、全体の基礎学力の底上げを図る。	・進路ガイダンス、進路LHR、高大連携事業等を充実させ、意識の変容を促す。また、朝学習、朝学習テスト、業者テスト等を効果的に活用し、各教科と連携を取りながら教科指導を行う。			
			・多くの生徒は挨拶が出来るが、日常の挨拶が出来ない生徒が少数いる。 ・授業の開始、終了時の分離礼を行わない生徒が少数いる。 ・10%弱の生徒は毎月の服装指導後に改善している。	・生徒が自発的に挨拶が出来る。 ・授業開始、終了時に全員が分離礼をすることが出来る。 ・常に服装規定を守り、安定感のある学校生活を送っている。服装改善の保護者文書発送を全生徒の5%にする。	・生徒の一人ひとりの配慮事項を考慮しつつ、学校生活のあらゆる場面で挨拶を徹底する。 ・授業においての分離礼を共通認識のもと徹底する。 ・毎月の服装指導と事後指導を徹底し、担任・学年団・学科・生徒指導部の連携を密にし、段階的・組織的指導を行う。また、保護者に対して丁寧な説明を行う。			
		学力向上と資格取得の推進	・昨年のFFJ級位検定合格率は、1年生初級合格、2年生中級合格ともに24%であった。 ・アグリマイスター前期認定者は3名、後期は認定者1名はすべてシルバーであった。難易度の高い資格は、測量士補1名だけであり、低調であった。	・FFJ級位検定合格率が初級40%以上、中級30%以上、上級位検定合格者数は10名以上（昨年8名）を目指す。 ・アグリマイスター（プラチナ認定）、農業技術検定2級、測量士補、危険物取扱者乙四種など難易度の高い資格取得を目指す。	・FFJ級位検定の意義や学習方法等の説明をとおして生徒のモチベーションを高める努力を続け、主体的に学習させる。 ・測量士補の合格者増に向け、外部指導者の活用や課外活動などを実施する。			
			・普通教科・農業教科の1部で、分割授業やティームティーチング授業を行い、生徒個々の能力を伸ばすためのきめ細やかな教育を行っている。 ・家庭学習時間調査を年2回実施し、生徒の家庭学習状況を把握した。学習時間の少ない生徒に対しては、ルーム担任を中心に指導している。 ・授業評価アンケートを年2回実施し、全教員が授業改善に努めている。	・分割授業やティームティーチング授業の実施する。さらに全教科でクロームブックを活用した学習の実践する。 ・家庭学習調査を実施し、学習時間1日0時間の生徒を前年度の半分にする。	・各教科で課題を積極的に出し、生徒の家庭学習時間を増やし、学力の向上に結びつける。家庭学習調査をグーグルフォームで行い、調査結果を担任がすぐに把握できるようにし、学習時間の少ない生徒には、声掛けをしていく。 ・年に2回、授業評価アンケートを行い、より質の高い授業への改善を図る。			
3	生徒の主体的な学びの推進	協同学習の推進と授業改革	・昨年度は協同学習をテーマとした研修会を1回と公開授業を9教科で行い、協同学習の手法による授業改革が着実に実践されつつある。 ・ICTの全体の研修会を2回、その他ICT関連の研修を該当教員で数回実施した。これによりグーグルアプリを活用できる教員も増え、授業で活用されている。	・全ての教科・科目でICTや協同学習の理論を取り入れた分かりやすい授業を実践する。 ・積極的なICTの活用、生徒の学習意欲と学力の向上を図る。	・協同学習をテーマとした公開授業を全員が行うために研修会を実施する。 ・全教員がICTを活用した授業を実践するために、ICT研修を学期に1回実施し、指導力の向上を図る。			
		生徒会活動と部活動の活性化	・生徒会活動は、執行部、農業クラブを中心に自主性が育ち始めているが、生徒が主体となって企画・運営する活動が少ない。 ・年間を通して活動している部活動が限られている。	・生徒会執行部の自主的な活動を通して、全校生徒が生徒会活動の意義を認識し、生徒会活動に積極的に参加できる。 ・中国大会と同程度の大会に出場する部が、文化系体育系農業クラブを合わせて4部以上となる。	・生徒会の活動を第2選択室とすることで、生徒会、農業クラブの活動を活性化させ、活発な意見交換の場とする。 ・生徒総会、農業クラブ総会、表彰式、壮行会等を充実させることにより、部活動に対する意識の高揚を図る。			
			・県プロジェクト発表会では、生物科の発表が3区分で最優秀賞を独占した。また、「お米甲子園」、「お米日本一コンテスト」で最高金賞をW受賞した。	・農業クラブ活動において、中国大会並びに全国大会の出場を目指す。また、地域に出掛けボランティア活動を行う。	・課題研究の深化を図り、農業クラブ活動を主体とし、各種交流事業など実践的な体験に多数参加させる。			
		寮教育の充実	・寮行事等、寮生が活躍し、変容を促す場面を設定している。 ・県外寮生との交流・情報交換をとおして祥雲寮での生活を振り返り、改善に繋げている。 ・自習時間（60～90分）を設定し、学力向上のための時間を確保している。	・年間を通じた行事で、明るい表情や一生懸命に役割を果たそうとする行動が見られる。 ・寮生サミットに参加し、他校寮生との交流をとおして課題を発見し、改善に向けて主体的に寮生会活動を行っている。 ・個人端末等を活用し、主体的に学習に取り組むとともに、FFJ検定等資格取得に積極的に挑戦する姿が見られる。	・寮行事を計画的に設定し、祥雲寮通信に様子を掲載し、保護者に寮生活の場面を配信する。 ・寮生サミット等、事前・事後指導を充実させ、自主的な交流ができるよう寮生会を中心とした寮運営を行う。 ・スタディサプリ等により、学習課題を配信するとともに、朝学習・漢字テスト、考査等の日程を意識させ、計画的に学習に取り組む環境をつくる。			
		倉農DXの推進による意識改革	・ICT研修会等によりGoogleアプリ等を活用できる教員が増えつつある。また、ICT活用サイトの各種リンクも利用されている。	・DXにより授業における教育効果及び授業以外の業務が効率化する。その結果、生徒の主体的学び学習意欲が向上する。 ・学校CIOアンケートにおいて、日常的（週に半分以上）に　ICTを活用している者が60%以上になる。	・Chromebookを用いた授業が積極的に行われるように、教務部と連携し、授業実践の研修会や研究授業を行う。			
			・DXハイスクール事業に採択され、プログラミング教育、ICT活用能力の向上などに取り組んだ。	・DX教育環境の整備、教員のスキルアップ、生徒のICT活用能力の向上とともに、農業教育との融合を目指す。	・外部機関の先進的な取り組みのある土木測量関連企業や産業人材育成センター、農業関連団体などと連携し、デジタル化やDX化の推進について学習機会の充実を図る。			
4	生徒募集・定員の充足	県内外生徒募集の取組の充実	・3学科とも定員を新入生ついてを満たせなかった。新設コースのある環境科の充足率は38%である。県外生徒は5名で昨年より3名減である。	・本校志望の受検生が75名を超え、充足率が74%以上となる。そのうち県外からの受検生が8名以上になる。	・中学生体験入学、オープンスクールの内容について、より本校の魅力が伝わる内容になるように工夫する。県外生徒募集に向けた地域みらい留学の効果的方法を模索する。			
			・新入生について生物科、食品科、環境科ともに定員を満たせず、合計70名であった。そのうち県外生徒は5名あり、合計15名である。 ・様々な取り組みをHP、SNSや各種メディアで発信している。本校の魅力が認知されつつある。 ・各分掌、各クラブによるHPへの掲載を呼びかけている。	・特色ある取組をマスコミへ情報提供、地域へ発信することによって、生徒の自己肯定感や達成感が高まる。 ・本校の活動が広く認知されるように、実習や各クラブの様子を担当者やクラブ顧問がHPにアップするよう働きかける。年間50回以上のHP掲載を目標にする。	・特色ある取組をHPやSNSに投稿する。また、マスコミへ情報提供し地域へ積極的に発信する。 ・教育支援部を中心に、各分掌や各クラブがHPを積極的に更新し、行事の様子など本校の活動を広く発信する。			
5	学校業務改善に向けての取組	長時間勤務の解消	・週休日振替については徹底できている。 ・時間外業務時間が増えないよう、業務改善が必要である。	・週休日振り替えなど事前に申請をする。 ・年間の時間外業務時間が360時間を超えない。 ・職場全体に業務を分担し、チームで仕事をこなす意識を浸透させる。	・週休日振替の取得を継続して徹底する。 ・一人一人が自分の働き方を振り返り、業務の優先順位を意識しながら、計画的に進めることで、時間外業務の削減とともに、多忙感の解消を図る。 ・業務の可視化を推進し、誰もが他者の働きぶりに関心を持ち、職場で支えあえる環境作りを促進する。			